

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990100356		
法人名	社会福祉法人正恵会		
事業所名	グループホームホームタウン上河内(おおり・しらさぎユニット)		
所在地	宇都宮市下小倉町1234-1		
自己評価作成日	令和2年9月10日	評価結果市町村受理日	令和2年12月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	令和2年10月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

GHHT上河内はご利用者様にとっての第二の家として安心、安全かつ穏やかに暮らして頂けるような空間作りを目指しております。ケアに関しては、ご利用者様にできる丁寧な声掛け、対応の徹底。各職員が担当ご利用者様のモニタリングの実施。モニタリングを踏まえカンファレンス、アセスメントを行い各利用者様のケアの方向性を考えケアプランを作成し、ケアプランに沿ってケアを実施しています。健康管理については、食事、水分、栄養、体重等の統計管理を実施。主治医、訪問看護との連携強化とケアプランを作成する参考資料として活用している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所独自の理念《生きる喜びを持って共に歩もう一歩ずつ「笑顔の風が吹き抜ける明るいホーム」》は、事業所開設時に在籍していた職員全員で作上げたものであり、事業所全体に利用者の笑顔が溢れるように心掛けている。帰宅願望が強く不穏な状況の利用者には、こまめな巡回をして声をかけ、見守りを強化して対応したり、利用者が繰り返り口にする疑問に対しても、本人が混乱しないように職員全体で返答を統一するなど、細やかな対応を介護計画に組み込んで支援している。食事は三食とも職員の手作り食で、ユニットごとに献立を立てており、利用者の状況によってその日の担当者が冷蔵庫内にあるもので工夫して対応することも可能で、家庭的な食事が提供されている。法人の方針により、年に3回管理者が職員と面談を行っていて、その際に職員自らが設定した職務や資格取得などに対する目標を聞き取り、次の面談時に進捗状況を確認している。このことから、職員が目標に向かって意欲を持って日々のケアにあたっている様子がうかがえる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果 (おおるりユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念、忠恕とホーム理念を基に真心と思いやりを持ってご利用者様に対しいつも笑顔で接して、実践につなげている。	事業所開所時に当時の職員全員で独自の理念を作り上げた。9年目となり、新たに理念の掲示場所を増やしたり、勉強会やユニット会議の際に説明して、新しい職員にも理解が深まるようにしている。理念に基づいて楽しい雰囲気づくりを日々提供するよう心掛けていて、壁に貼りだされている四季折々の行事の写真には、利用者の笑顔がたくさん見られる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域に根付いた施設としてはあるが挨拶程度で日常的なかかわりはない。	新型コロナウイルス感染が広がりを見せるまでは、地域の祭りや花火を見に行ったり、地元のボランティアが訪問し歌を歌ってくれたりしていたが、現在は感染防止のため地域と交流ができていない。新型コロナウイルスの状況が改善すれば、町内会とのつながりを今後さらに深めていきたいと考えている。	回覧板でホームの便りを回してもらったりなどして、グループホームとはどういうところなのか地域住民に理解を深めてもらい、地域とのつきあいがさらに深まることが期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人としていちごハートネットとして登録している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	おおむね2ヶ月に1度、会議を開催し、サービスの実際を報告、意見を求め向上に生かしている。前年度よりご家族様にも出席の依頼をするようにした。	運営推進会議は、併設の小規模多機能型居宅介護施設と、グループホームの二つのユニット合同で開催しており、議題は主に事業所からの報告である。参加者は主に地域包括支援センターの職員、自治会長などで、利用者や利用者家族にもできるだけ交代で参加してもらっている。コロナ禍においては、ファックスで議事を送付し、それに対する質問意見を送り返してもらう形で開催している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	以前までは自治センター職員様に運営推進会議に参加してもらっていたが現在は自治センターが閉鎖となってしまった為市役所に移行となり手続きくらいの関係となっている。	宇都宮市上河内自治センター(市町村合併前の役場に設置)の閉鎖に伴い、担当課が本庁に集約され遠方になったため、直接的な連携が容易に取れない状況である。運営推進会議には、地域包括支援センターの職員2名が参加していて、事業所内の事例報告に対して意見をもらったり情報交換をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関しては、ユニット会議後に3ヶ月1回年4回身体拘束対策検討委員会を開催し、身体拘束についての理解を深めたり、話し合いをする機会をつくっている	事業所の職員だけで年に4回身体拘束等適正化検討委員会を開催し、ユニット毎に勉強会を行っている。勉強会の資料はインターネット等を利用して用意し、言葉での抑制などをしないよう職員に伝えている。身体拘束について注意すべき点を確認するためにも、勉強会を定期的開催する必要性があると職員もとらえている。	身体拘束等適正化委員会の構成メンバーは、事業所の管理者及び職員に加えて、第三者や専門家を活用した構成とすることが望ましいとされている。その方策として、認知症対応型共同生活介護においては、運営推進会議と一体的に設置・運営することも差し支え無いとなっているので、身体拘束等適正化委員会のあり方を検討することが期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に虐待についての勉強会を行いどうゆう事が虐待なのか、また虐待につながってしまうのか、虐待を防止するためにはどうしたら良いか理解できるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ユニット会議にて権利擁護、成年後見制度についての勉強会を行っている。入居者には基本、ご家族様にキーパーソンとして後見人になってもらっているが、ご家族のいない方に対して法人として活用するのが課題である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書にて十分な説明を行っている。改定の際は文書を送付し説明したうえで、同意を頂き同意書を残すようにしている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	2ヶ月1度、運営推進会議にて地域の方にも参加していただいている。ご家族にも毎回、参加していただくため手紙を送付している。今後地域と連携していきたいと思っている。	アンケートを実施した際に、職員の名前がわかるようにしてほしいと家族から要望があり、事業所の入り口に職員の顔写真と名前を貼り出すようにした。運営推進会議の場や、来所した際、また電話で状況を報告する際にも意見等を聞くようにしているが、現時点で運営に関する意見は特に出していない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議や面談で意見や提案を聞く機会を設けている。	法人の方針で年に3回職員と面談を行っていて、職務や資格取得などに対する職員自らの目標と、その進捗状況をその都度確認している。その際に日常のケアに関する意見を聞き取っているほか、管理者ができるだけ現場に入って、面談の時以外にも、ユニット会議などで意見を出しやすくするよう心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人で目標管理シートや計画管理シートで3期に分けて評価し給与や賞与に反映している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	出来る限り研修に参加できるようにしているが法人以外の研修にも参加できるようにしていきたい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内での交流はあるが外部との交流は少ない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	会話や日々のケアの中で本人のニーズを見出している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の契約の説明の時に聞くようにし、その後も要望があれば可能な範囲で対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご家族から聞くのはもちろんのこと、元々のケアマネからも意見を聞き、その人に合ったケアを出来る範囲で行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立支援として洗濯物たたみやテーブル拭き、また簡単なおやつ作りなどご本人のできることを通してコミュニケーションを図りながら行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員で対応が難しいところをご家族様の協力を得て支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親戚やご友人の面会は拒まず関係が途切れないように支援している。今年度は新型コロナウイルスの影響で感染防止のため面会が7月末まで自粛されていた。	新型コロナウイルス感染が広がりを見せるまでは、職員が買い物に行く際に一緒に車に乗乗して買い物に行ったり、家族に依頼して自宅や馴染みの場所へ花を見に行ったりしていた。8月から短時間ではあるが面会のみ再開している。	近くに住んでいる家族とはうまく連携が取れているが、近くに家族がいない利用者については、馴染みの人や場との関係ができるだけ継続できるように支援されることが望まれる。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席もレベルや気の合う人と同じテーブルで関わり合いが持てるようにした、両ユニット間を行き来できるようにしている。トラブルが生じた場合には職員が仲介したり、席替えの検討もしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	申請の代行など手伝いをしている。また質問があった際は答えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人のニーズに対しユニット会議で話し合いを行い検討している。	職員から利用者に積極的に声をかけて思いを把握するよう努めていて、把握できた思いは会議等で職員全体で共有するようにしている。自身の言葉で訴えるのがむづかしい利用者については、できるだけみんなの前ではなく、お風呂に入っているときや散歩のときなど一対一になった時に話しかけて、思いを把握するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際、ご家族または親戚の方に情報をもらうようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご本人に合わせたケアを検討してサービス提供をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各担当者がモニタリングを行い、ニーズを考えて介護計画を作成している。	担当制になっており、利用者それぞれの担当者が家族とのやり取りも含めて日々モニタリングをして、更新が近づいている利用者についてはユニット会議でカンファレンスを行っている。食事がなかなか取れなくなった利用者について、職員の提案により器の色を変えたり、協議してご飯をおにぎりに変更したことで、食事の摂取量が回復した事例などがある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々のケース記録を作ったうえでモニタリングをし、ユニット会議でカンファレンスを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	要望があればこたえられる範囲で検討をしている。日々のケアの中でニーズを探りつつ取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	グループホームでは難しく活用できていない。行事でボランティアに来てもらっている程度。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の希望を大切に、かかりつけ医と事業所との関係を大切にしている。	ほとんどの利用者は、入所後、かかりつけ医を事業所の協力医療機関に変更し、職員の通院介助で定期受診するか訪問診療・往診を利用している。受診結果は家族に必ず電話で伝え、月1回の事業所からの便りでも知らせている。職員はユニット毎のノートで情報を共有している。整形外科などの専門病院を受診する場合は家族が対応していたが、コロナ禍で現在は職員が有償で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪看に相談したいことや日々のデータ等を週1回の訪韓時に報告し指示やアドバイスを受けられるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中の情報を交換している。利用者の様の状況を把握し、退院してからの対応、の指示をいただいたり、病院関係者との関係づくりを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所前の契約内容説明時に重度化された場合や終末期を迎えることになった際の話をするようにしている。また重度化、終末期が近づいてきた際は再びご家族様と話し合いをするようにしている。	協力医療機関のかかりつけ医による訪問診療・往診と、医療連携体制加算で看護師が設置され、看取り介護も加算で行う等、看取りの条件が整っている。現在は該当者はいないが、今までに看取りの経験はある。入所時に家族は重度化した場合や終末期のあり方について説明される。実際に看取りを希望する場合、その時期になった時に改めて看取りに関する重要事項説明が行われ、医療等関係者を交えた話し合い後、看取り支援が行われることになっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時対応マニュアルを作成し活用している。また勉強会を行い学ぶ機会もつくっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災と水害の避難訓練を行っている。地域との協力体制についてはできていない。	消防訓練は、総合訓練を年2回、利用者も参加している。そのうちの1回は消防署立ち会いで実施している。避難訓練は、勤務のシフトと前回の役割を加味して職員の役割を決め、計画的に行っている。今年度の訓練の改善点は、マニュアルの見直しと周知の必要性を挙げていた。これからユニット会議で改善を検討する予定となっている。「洪水時の避難確保計画」に沿った避難訓練はこれから行う予定である。コロナ禍でも、できる訓練は行う努力をしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご利用者一人ひとりが人生の先輩であることを忘れずに、しっかりと対応や丁寧な声掛けを心掛けている。同時にご利用者の人格や誇り、プライバシーを損ねないようにしている。	プライバシー保護や人格を尊重する支援で大切なことは、「排泄時のケアではトイレの扉の閉め忘れ」、「利用者が自分の時間を過ごしているときの居室の開閉」、「利用者の言動をまず受けとめることの必要性」などを管理者は挙げている。管理者は職員に「利用者が何を言いたかったのか」「どうしたいのか」を受けとめて支援をするように伝えている。また、職員一人ひとりが不適切な言葉掛けや対応をしないように努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自分で訴えられる方にはご本人から、また意思表示の難しいご利用者は家族や日常生活からくみ取って働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	可能な限り一人ひとりのペースや希望に沿うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自己決定できるご利用者にはご自分で選んでいただき難しい方には気候に応じた服や清潔を心掛けて支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	出来る限り好みに合わせたり外食で好きなものを召し上がっていただくようにしている。食事は職員も一緒に同じテーブルで食べるようにしている。	日常的な買い物は4日に一度位行き、家庭と同じように三食とも職員がその日に有る食材で献立を考え調理している。利用者の状態や嗜好も考慮して、きざみ食を用意したり、苦手な食材を変えて別メニューで対応するなど工夫がされている。コロナ禍で外食の機会もなくなっているが、「カレーの日」「うどんの日」「焼きそばの日」などと予告することで、楽しみにしてもらおう試みもしている。また事業所内で行う行事に合わせた行事食や、レクリエーションの延長で利用者と一緒におやつを作ったりしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量のデータに基づき、また医療的アドバイスに基づいて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	訪問歯科のアドバイスをもとに実施している。毎食できなければ1日1回は行うようにしている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は出来る限りトイレで排泄できるように支援している。難しいご利用者でも2人介助にて行う対応をしている。出来る限り誘導を行いご自分で排泄できる環境を作り自立につなげる支援を行っている。	職員はなるべく自分のタイミングで排泄できるように支援を心がけている。言葉で意思表示できない人でも職員は察することでトイレでの排泄をできるだけ可能にしている。1ユニットに2箇所あるトイレは、利用者がつかまりながら自立して排泄できるように、サイド、メッシュ、バーなど形状の違う手摺りが設置されている。夜間は紙おむつやポータブルトイレを使用する利用者もいるが、日中はリハビリパンツやパットを使用して、トイレでの排泄の自立支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	勉強会を行い便秘の原因や予防、便秘がもたらす影響などを理解し、主治医や訪看と連携し対応している。起床時に冷たい牛乳を提供したり水分摂取量を把握したり運動も取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個人入浴であり、一人ひとりに声掛けしご本人のタイミングに合わせて入浴していただいている。お風呂の好きな方には週2回以上の入浴ができるように支援している。	浴室は、天井のヒーターによって室温が保たれ、左右どちらからでも介助ができる個浴槽が設置されているため、重度化しても二人介助で入浴を可能にしている。利用者は、週に2, 3回午後一人づつ個別対応で入浴している。入浴を拒否する利用者には、声を掛ける職員を代えたり、時間が経って再度声を掛けるなど工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとり個室であり、体調体力に考慮して休みたいときに居室で休むことができる。夜間、眠れないときは話を傾聴したりフロアで職員と過ごすなどの対応をして安心していただいている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理簿に処方箋を保管して、確認で来るようにしている。変更があった場合は連絡ノートにも記載して情報の共有に努めている。変わったことがあった場合には主治医に報告している。服薬は職員が管理している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ご利用者のレベルに合わせ、洗濯たたみやテーブル拭き等、コミュニケーションを図りながら行ったり、今年度は新型コロナの影響で外出や外食ができないが、散歩や物作り等、気分転換や楽しみを持てるような支援を心掛けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご利用者の中にはホーム外の散歩を楽しみにしている方もおられ、可能な限り散歩の支援に努めている。またコロナがはやる前はご家族との外食を月に一度楽しまれていた方もおられたが、2月以降コロナの影響で外出等の支援が難しくなっている。	職員と一緒に順番で行っていた買い物や、季節ごとの花見などの外出や外食、家族との外出もコロナ禍でできなくなっている。現在は施設の周辺を散歩する程度である。せめて散歩に出かけられるように職員は時間を作って対応している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	毎月ご家族から数千円のお小遣いを頂き、自販機でジュースの購入を楽しみにされているご利用者もおられるが、認知症の進行から難しいご利用者が多い。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナの影響で面会が出来なかった時期にはご家族から声だけでもとのことで電話でお話をされるご利用者もおられ、また希望があれば電話ができるように、支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	湿度計や温度計を参考にエアコンや扇風機を使い過ぎしやすい温度設定を心掛け、換気にも注意をしている。日差しが強いときはブラインドを閉める等の対応をしている。壁面の装飾などは、季節に合わせて飾りつけを変えている。	陽の光が差し込んで明るいリビングは、日差しを遮光ブラインドで調整し、テーブルやソファの配置を工夫し、過ごしやすい共有空間としている。対面式キッチンで、職員に見守られ、調理する気配を感じながら過ごしている。リビングの壁には季節の行事を感じさせるハロウィンの飾りつけが成され、廊下には、月ごとの行事での利用者の楽しそうな表情の写真が貼られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	教養空間では一人になるスペースは難しいが、居室は個室であり、休みたいときや、一人になりたいときは居室で過ごされている。フロアでは相性やレベルに合わせた席の配置を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は個室であり、ご自宅で使い慣れたたんすなど好みのものを持ってきていただき、使い易く居心地の良い空間を作っていたいでいる。	居室は、部屋毎に違う花のプレートで区別しているが、利用者が間違わないようにドアに大きく漢字で書かれた名前が貼られている。居室には洗面台とエアコン、カーテンが取り付けられ、ベットと小さなキャビネットが設置されている。利用者は筆筒やテレビ、イスなど思い思いの物を持ち込み、職員の支援できれいに整理整頓がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりのできることわかることを把握して、ご自分で行えることは行って頂き、難しいご利用者も見守りや声掛けを行い、できるところまで行って頂き残像機能が維持できるように努めている。		